

東南アジア研究所シンポジウム

**災害に立ち向かう地域／研究
生存基盤持続への寄与をめざして**

G-COE「生存基盤持続型の発展をめざす地域研究拠点」

若手研究者養成部会・イニシアティブ4

&

萌芽科研「防災教育・自然災害復興支援のための地域研究を目指して」

共催

本シンポジウムは、「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」の形成を目指した活動の一里塚として、若手研究員の研究成果を取りまとめ、地域研究の新たな展開、少なくともその方向性と可能性について議論し、明らかにしようとするものである。

地域と研究の間に「／」が入っているのには、2つの理由がある。1つは、災害に対して、地域住民は立ち向かうが、地域研究は真正面から立ち向かってこなかった。そのことと関連して、第2には、地域住民と研究者のあいだに、実際の亀裂や懸隔がある。それを明示するための斜線である。したがって、「／」は、問題の所在を示している。

問題があるところに、初めて研究への動機づけが生まれる。問題意識がなければ研究は始まらない。本シンポジウムの初発の問題意識は、以下のとおりである。

災害対策・対応・克服に関わる行政関係者や大学研究者は、「防災・減災・復興のためには、当該地域の住民自身の積極的な関与、コミュニティの役割が重要である」との認識を共有している。しかし最も重要な「地域」あるいは「コミュニティ」の内実は、ブラック・ボックスのまま放置されている。空疎な内実の周囲を空回りしているだけでは、限られた資源を適切に配分し、有効な対策を立てることに限界がある。そのことを危惧し、地域研究／文化人類学からの可能な貢献の一方途として、個別の被災コミュニティの内実に応じた、防災～災害緊急援助～長期復興支援への積極的な関与の可能性を考える。

確かに地域・コミュニティは使い勝手の良い便利な言葉である。しかし一国内においても、ましてや異なる国では、その実態が異なる。地域・コミュニティという言葉の含意とは裏腹に、その実態は均質で友愛に満ちた調和ある集団ではない。地域・コミュニティの内部には、親族姻戚関係、友人知人のネットワーク、政治的派閥、貧富の階差、性差、宗

教・民族、年齢、その他によってさまざまな亀裂や分断線が走っている。地域・コミュニティごとにその内実、すなわち成員の構成や生活・秩序の維持・運営のされかたが異なると言って過言ではない。

それゆえ、被災地・コミュニティの歴史背景や現状の政治経済的・社会文化的構成の特徴に応じて、きめ細かに応じた対策を立てることが復興のために不可欠である。とりわけ、アジア地域・アジア各国では、言語・文化を異にする民族が多数共存しており、巨大災害においては複数の民族集団が同時に被災することも珍しくない。(東南アジア) 地域研究者が防災～復興の具体的なプロジェクトに、積極的に貢献する可能性と介入すべき理由がある。

また他方では、災害を、生存基盤を揺るがし、ときに破壊する脅威として捉えることをとおして、問題の所在を逆転させ、そもそも生存基盤とは何か、それを持続させるためには何が必要なのかという問題について考え、生存基盤という概念自体を鍛えあげることがめざす。さらには、災害に関わる諸問題への取り組みをとおして、地域研究と文化人類学の再活性化の可能性を考える。単に院生の就職先として災害関係プロジェクトや機関がありうるというだけでなく、ディシプリンそのものの概念や方法の鍛えなおしも目指している。

人間の(全生命体の?) 生存基盤には、さまざまなレベルがある。何よりもまず、各個人の身体そのものが生存の基盤である。新生児や乳幼児にとっての母と父、長じては家族・親族・社会もまた生存の基盤となる(ヒトのみが家族・親族および群れ・社会という二つのレベルの集団を生存の基盤として有する)。さらには、地域社会、ネットワークで結ばれた諸関係、そして国家もまたひとつのレベルの生存基盤である。そして水・空気・土地を要素とする全体的な生態・自然環境もまた、不可欠の生存基盤である。

そうした異なるレベルでの生存を揺るがす脅威として、本シンポジウムで念頭に置いている災害は、具体的に、1) 重篤感染症、2) 地震・津波、3) 台風・大雨・洪水、4) 旱魃・塩害、5) 紛争(戦乱)、… などである。すなわち、きわめて短時間のあいだに安寧な日常生活の存続を困難あるいは不可能とし、人の生き死にを左右するような出来事である。

プログラム

日時： 7月11（金）～12（土）

場所： 京都大学東南アジア研究所・東棟2階大会議室（E207）

7月11日（金）

13：30－13：40 趣旨説明

13：40－14：20 清水展（京都大学東南アジア研究所）

生存基盤が壊れるということ：ピナトゥウボ山大噴火（1991）と先住民アエタの被災と新生の事例から

セッション1：突発的に起こる災害と地域社会

14：20－15：00 西芳実（東京大学大学院総合文化研究科）

「災害に強い社会」を考える：2004年スマトラ沖地震津波の経験から

休憩（20分）

15：20－16：00 遠藤環（埼玉大学経済学部）

都市のリスクと人びとの対応：バンコクのコミュニティにおける火災の事例から

16：00－16：40 木村周平（京都大学東南アジア研究所）

将来の地震の不安と地域社会：トルコ、イスタンブルの事例から

休憩（20分）

17：00－18：00 コメントおよび総合討論

コメンテーター：林勲男（国立民族学博物館）

懇親会（清水屋）

7月12日(土)

セッション2：漸次進行する災害と生存基盤

10:30-11:10 甲山治(京都大学東南アジア研究所)
温暖化および気候変動にどう対応するか? : 水災害を事例として

11:10-11:50 佐藤孝宏(京都大学東南アジア研究所)
農業水利変容とその影響 : インド・タミルナドゥ州の事例

昼休み(100分)

13:30-14:10 生方史数(京都大学東南アジア研究所)
塩と共に生きる? : タイ東北部における塩害と生存基盤

14:10-14:50 西真如(京都大学東南アジア研究所)
ウイルスと民主主義 : エチオピアのグラゲ県におけるHIV/AIDS問題と地域社会の取り組み

休憩(20分)

15:10-15:50 山本博之(京大地域研究統合情報センター)
自然災害で現れる「地域のかたち」――インドネシアの地震・津波災害の事例から

休憩(10分)

16:00-17:30 コメントおよび総合討論
コメンテーター : 門司和彦(総合地球環境研究所)